

授業評価における評価者の評価に関する語彙数に関する研究 —語彙数、満足度、語彙数と評価者の特性との相関—

岡 田 圭 二

要 約

授業評価を行う評価者である学生の授業に関する知識や評価能力に関する基礎的な検討を行った。授業を評価することに関する語彙の数、満足度に関する語彙の出現、勉強や学校に対する姿勢と授業を評価する語彙の数の相関について、女子短大生を対象に検討した。その結果、授業評価に関する言葉は一人あたり平均14.59語の回答数があった。また授業についての満足、満足度、不満という言葉は調査結果に表れなかった。また勉強等に対する態度と語彙数の間に高い相関はなかった。

1. 目的

授業評価に関する多くの問題がある。例えば、授業評価が何を測定するのかという妥当性の問題、さらに、その評価結果の信頼性の問題などが考えられる。これらは、いずれも評価自体に関する問題とできる。

そして、評価をする評価者に関する問題もある。評価者の能力や特性により、評価結果は変わってくるのが考えられる。日常的な例として、料理の評価について考えてみよう。もし料理を評価する者が料理を評価するための語彙や概念が少なかったとする。すると、その料理の評価は単純になる。甘

いと苦いしか知らなければ、酸っぱいとか、塩辛いとか、コクがあるといった評価はできない。同様に、授業評価において、評価者が授業に関する評価基準を持っていなければ、その評価結果は、授業の一面的な側面しか測定できない。例えば、面白いという評価基準しか持っていなければ、もしくは面白いという評価基準を強く意識していれば、「学問的に重要である、役に立つ、興味深い」といった評価は行いにくいと考えられる。適切な授業評価をするためには、評価者がどのていどの語彙すなわち評価基準となる基準をどのていど持つかという問題が第1に考えられる。そしてその内容はどのようなものであろうか。

第2に、その評価基準となる語彙は、評価者の特性とどのように相関しているのであろうか。学生による授業評価に関する批判として、不真面目な学生に評価されたくないというものがある。はたして勉強や学校に対して好意的な態度を持っていない学生は、授業評価に関する語彙数が少なかったり、逆に非常に高かったり（＝評価基準が高すぎて、豊かすぎて、授業に満足できない）という状態がありうるのであろうか。

第3に、授業評価の評価基準として「満足したかどうか」という基準に問題があると挙げられることがある。この「授業に満足する」という評価基準は、授業に関する評価基準としてもともと学生にあるものなのであろうか。私には、外食産業やホテルなどのサービスに対して満足するという評価はよく分かる。しかし授業や学習に対して満足するという評価は本来のものなのであろうか。学習者がもともと持たない場合、授業における満足とは何かを学習者（＝評価者）に教育する必要があるだろう。もしくは授業に関する満足を測定するのではなく、その他の評価基準の選択をする必要がある。

これら3つの問題意識をもとに、授業評価における評価者である学生は、授業に関する評価を行う言葉をどのていど持っているのか、さらにその内容はどのようなものなのか、学生の特性との相関がどのようになっているか、最後に満足という言葉が出てくるのかを調査した。

2. 方法

2-1. 被調査者

愛知大学短期大学部の1年生84人、2年生2人、合計86人が調査に参加した。

2-2. 調査日時

2010年5月中旬に実施した。調査は、金曜日3時間目の人間関係論1の授業中に行った。

2-3. 調査場所

愛知大学豊橋校舎 7号館701号室にて調査を行った。

2-4. 質問紙

調査は、B5の用紙1枚を用いて行った。全体を3分割し、一番上の部分を語彙調査の記入欄とし、真ん中部分を調査者の特性の記入欄とし、一番下に授業評価自体に関する印象や感想を自由記述できるようにした。語彙調査の欄には、1から5までの数字を1行毎に記入してもらった。これは、5分間の記入時間のうち、1分毎に記入欄を変えてもらうために使用した。調査者の特性の記入欄には真面目度、学校好き度、学校嫌い度、勉強好き度、勉強嫌い度の5つの行を設定してもらい、被調査者にこの項目名を行毎に記入してもらった。

2-5. 手続き

調査は、人間関係論1の授業を利用して集団に対して行った。まず、調査用紙を配布し、次に、調査の目的として、授業を評価するための言葉を収集している、それを配布した紙に記入するようにと教示した。記入時間として

5分間ある、1分毎に合図を行う、合図があった場合に、次の行へ記入を行う、まず①と記入し、記入を開始すること、1分間が経過した際に合図があったら、次の行の行頭に②と記入して、授業評価用の言葉を記入する、その後、1分ごとに③、④、⑤と記入する、その1分間に言葉を記入できなくても、次の行に進むことと教示した。これは、1分毎の記入数を測定することを目的として行った。

語彙調査の5分間が経過したら、次に評価者の特性を測定した。測定は、まず、調査用紙に、真面目度、学校好き度、学校嫌い度、勉強好き度、勉強嫌い度の5つの項目を1行毎に記入させた。これらの度合いを、1から5の数値による5件法で記入させた。数値が増えるほど、その度合いが高くなることと教示した。これを約3分程度で行わせた。

この評価が終わった者は、最後に授業評価に関する印象や感想を、用紙下部に自由に記入するように教示した。全員が記入し終わったら、用紙を回収した。

3. 結果と考察

3-1. 集計方法

86人の学生から、調査用紙を回収し、単語数を集計した。ただし、一部の回答には「周りの人が喋っているさい」、「説明が長くて、何が大事か分からない」といった文による回答もあった。このような文による回答は少数であった。そしてこれらの文による回答も1語として数え上げた。

3-2. 回答語数

調査用紙に記入された総語数は、1255語であった。一人あたりの平均回答語数は14.59語となった。最小数の回答語数は1語であり、最多の回答語数は34語であった。回答語数に関する度数分布表を表1に、度数分布多角

形を図1に示す。図1の度数分布多角形から分かるように11個から15個の被調査者が一番多く、図1の形をみるとほぼ正規分布している。5分間すなわち360秒内において14語を回答したということは、25秒に1語となる。

表1 回答語数に関する度数分布表

データ区間	出現回数
1-5	4
6-10	18
11-15	31
16-20	20
21-25	5
26-30	5
31-35	3

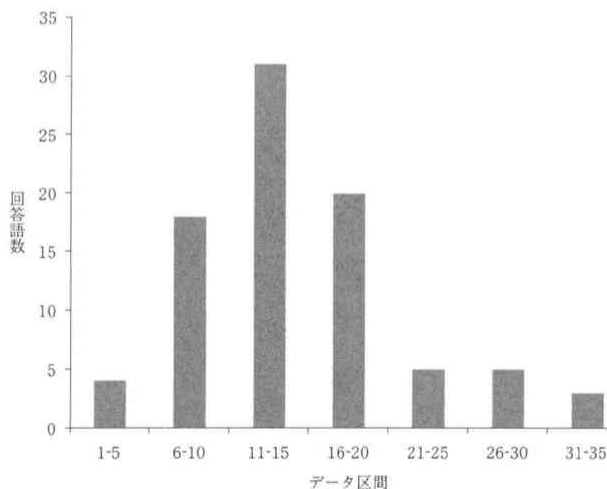


図1 回答語数に関する度数分布多角形

3-3. 回答内容の分析

次に、回答の中から、「楽しい」、「面白い」、「つまらない」、「わかりやすい」、「難しい」などのよく目につく言葉19個を選び、それぞれの言葉が回答中にいくつ出てくるかという出現頻度を数え上げた。結果を表2に示した。楽しい、面白い、つまらないという言葉の出現頻度が非常に高い。同様にわかりやすいという言葉も42個が出てきている。「興味深い」や「勉強になる」といった学習や教育と関連が高そうな言葉の出現頻度は、「楽しい」に比べて低い。

表2 特定の単語毎の出現回数

単語	出現回数
楽しい	68
面白い	50
つまらない	46
わかりやすい	42
難しい	31
役に立つ	28
眠い	27
わかりにくい	19
ためになる	17
わからない	11
簡単	10
楽しくない	9
興味深い	8
勉強になる	7
だるい	6

これら「楽しい」、「面白い」、「つまらない」という言葉が高い出現頻度を持つことは、授業の評価という点で妥当なことなのであろうか。学生の側から楽しい授業を受けたいという要求や期待があることは理解できる。し

かし、楽しい授業というのは副次的なものであり、授業自体は直接的に楽しさを求めるものとは考えづらい。上位3個の単語以下は、「わかりやすい」、「難しい」、「役に立つ」といった授業や学習に直接に関連する内容の言葉が出てきている。

評価者の教育という観点からすると、学習と関連性の高い「わかりやすい」、「役に立つ」、「興味深い」といった言葉が上位に出てくることが望まれる。授業において学生自身が何を求めているのか、その求めている内容は妥当なのかということ、学生自身が考える機会には必要ではないか。例えば、食事であれば、「単に安い、腹が満たされる、量が多い」ではなく、「栄養、食文化」といったことを考え、実行することが、その人の食生活を豊かにする。それと同じように、学生が学習や教育自体を深く自分のものとして考える機会が、学生の学びを豊かにするのは間違いないだろう。

3-4. 回答内容における授業の満足に関する分析

次に「満足した」、「満足」、「不満」といった授業満足度に関係するとされる単語の出現頻度を表3に示した。いずれも1255語の回答において、出現頻度は0個であった。

表3 満足に関する単語の出現回数

単語	出現回数
満足した	0
満足	0
不満	0

この調査は、高等教育機関における授業評価を実際に行う前の短大1年生が約98%をしめる授業において行った。その学生達の授業を評価するための基準、言葉に「授業に対する満足」がないということは、先に述べたように授業の満足に関する評価をすることの教育の必要性があること、もしくは

授業を満足という基準によって評価することが妥当なのかを再検討する必要があることを示唆している。先にも挙げたが、料理の味について知らないものが料理を評価することのナンセンスさに通じる問題である。また逆に、授業はもともと満足という評価基準は適切ではないにも関わらず、満足という基準で無理に評価させているという可能性も否定できない。たとえるならば、味の評価基準に「明るい」という評価はしにくいにもかかわらず、無理に「明るい」という言葉で評価しているという状況に類似している可能性はないか。いずれにせよ、授業を満足という基準で評価することを再考する必要があることの一つ証拠にはなるだろう。

3-5. 回答語数と回答者特性の相関

最後に、回答語数と回答者の特性の相関を表4に示した。いずれも、相関係数が0.3以下であり、弱い相関もしくは無相関に近い結果であった。このことから、回答者の特性が回答語数と何らかの関係を持っているとはいえない。また散布図を描いてみても、U字または逆U字の型をした相関等は見受けられなかった。

表4 回答語数と回答者の特性の相関

特性項目	相関係数
真面目	-0.12
学校好き	0.29
学校嫌い	-0.25
勉強好き	0.26
勉強嫌い	0.01

これらの結果から、被験者の特性と回答語数に何らかの関係は認められないことが推察される。回答語の内容、例えば好意的な内容か否定的な内容かなどが相関している可能性があるかもしれない。今後、検討しうる方向性ではある。

4. 今後の検討点

第1に、今回の調査において、語彙数自体を何かの項目と比較していないため、語彙数自体が多いとか少ないということはいえない。例えば、今回の調査の主たる対象は短大1年生であった。これが短大2年生になった場合、語彙数やその内容はどのように変化するのだろうか。そのような調査が行われた場合、評価者の教育や評価経験という点から重要な示唆を与えると考えられる。第2に、今後、授業の受け手としての立場からの評価の言葉と、学習者が自分自身の学びの進歩や自分の学びへの満足度という評価をする場合の言葉としてどのようなものを持っているかの比較をすることは、授業の評価ではなく、教育の本質に近い学びの評価に関係しているという点でより重要なものとなりうる。このような点において、自分の学びを評価する言葉に関する調査も示唆深いものになるだろう。